

日本語教育における学習ウェブサイト開発の課題
- どうすれば有用な協働作業の場を作ることができるか -

Challenges in the Process of Developing the Learning Website in Japanese Language
Education

- An Attempt to Build a Community for Effective Research Collaboration -

横浜国立大学国際戦略推進機構・中川 健司

フリーランス・角南 北斗

キーワード：学習ウェブサイト 協働 当事者意識

外国語キーワード：learning website, research collaboration, sense of commitment

要旨

日本語教育に関する学習ウェブサイトの開発が円滑に進まない場合、その要因のひとつに、日本語教師とウェブ制作者の間で十分な協働作業が行われていないことがあるのではないだろうか。この両者が主体的に、開発のプロセスの最初から最後まで関わるような形が、質の高い学習ウェブサイトを作るうえでは不可欠であるが、どうすればそのような協働作業の場を作ることができるのだろうか。筆者の中川と角南は、それぞれ日本語教師とウェブ制作者の立場で、これまで介護福祉士国家試験受験に向けた介護用語学習のための3つのウェブサイトの開発に関わってきたが、本稿は、それぞれの立場からどうすれば有用な協働作業の場を作ることができるかという課題について「対談」の形で述べるものである。

Abstract

When development of a website for Japanese language education does not progress smoothly, one of the factors may be that there has not been sufficient cooperation between the Japanese educators and the authors of the website. In building a high-quality learning website, a relationship from the beginning to the end of the development process is indispensable, but with both of these parties being independent how do we create that sort of work environment? Authors Nakagawa and Sunami, from both the standpoint of a Japanese language teacher and web designer, have been involved in the development of three web sites for studying caregiver terminology to aid those looking to take the State Examination for Certified Care Workers, and in this article, elaborate in the form of "dialogue" on how to create an effective, collaborative work environment from both standpoints.

1. はじめに

日本語教育に関する学習ウェブサイトの開発が円滑に進まない場合、その要因のひとつに、日本語教師とウェブ制作者が、互いの専門領域を意識するあまり、双方の領域が重なる「学習のデザイン」という部分において十分な協働作業ができていないことが挙げられる。

ウェブサイトの機能やシステム構成を考える作業は、一見ウェブ制作者の仕事のように思えるが、実は「学習をどう捉えるか」という教育的視点も必要なことが多い。また逆に、教師が描く学習プロセスにウェブサイトを効果的に絡めるヒントは、ウェブ制作者の持つ技術的な視点にあることも多い。だが実際は、日本語教師はコンテンツのデータの提供のみを自身の役割と捉え、ウェブの技術的な話題を敬遠したり、学習プロセスの検証を自身の頭の中だけで行なったりしがちである。その結果、有用性に欠けるウェブサイトができあがってしまうことになる。

開発の前半を日本語教師が担当し、後半はウェブ制作者に任せっきり、というような分業のプロセスではなく、最初から最後まで両者が主体的に関わるような形が、質の高い学習ウェブサイトを作るうえでは不可欠である。筆者の中川と角南は、それぞれ日本語教師とウェブ制作者の立場で、これまで介護福祉士国家試験受験に向けた介護用語学習のための3種類のウェブサイト「介護の漢字サポーター^{注1}」「介護のことはサーチ^{注2}」「かいごのご!^{注3}」の開発に関わってきたが、本稿ではどうすればそのような協働作業の場を作ることができるのか模索する

2. 学習ウェブサイトにおける「学習のデザイン」に向けた協働について

本稿では、筆者2名がそれぞれ日本語教師とウェブ制作者の立場で関わったウェブサイト開発での経験を基に、どうすれば有用な協働作業の場を作ることができるかという課題について「対談」の形で述べる。ここで「対談」という形式を用いるのは、日本語教師とウェブ制作者という異なる視点から語ることににより、学習ウェブサイトの開発上の課題を明確にするためである。

2-1 日本語教育の学習ウェブサイトの制作にはいくつかのハードルが存在する

角南：これまで僕は学習ツールとして使えるようなサイト、いわば学習サイトを多く手がけてきたんですが、価値あるサイトにできるかどうかのポイントとして僕がよく考えるのが、そのサイトを使った「学び」の部分を誰がデザインするのか、ということです。たとえば、教育関係者とウェブ制作者という二つの立場を考えると、今回だと前者が中川さん、後者が僕になりますよね。中川さんは、漢字のデータなどのコンテンツを用意する。

いっぽう僕は、サイトを形作るためのウェブに関する技術を提供するわけです。この考え方自体はまったく間違いではないんですが、コンテンツと技術を使って何を作るのか、何を作れば学習者や教師の役に立つのかを考える作業が、どちらの担当になるかが曖昧になりがちです。僕の考え方では、そこは両方の担当ということで、互いに知恵を出し合ってデザインしなければならないと思っています。でも、どうも教育関係者は「ネットとかパソコンは詳しくないんで・・・」と、ウェブ制作者に任せがちになることが多いと感じますね。

中川：自分の持っているデータでどんな学習サイトが作れるか、そこを日本語教師だけで具体的に考えるのは、なかなかハードルが高いような気がします。今回の私のケースを話しますと、医学分野の専門用語とそこに出てくる漢字に注目したのが始まりで、それが介護分野の漢字の研究に発展しました。当時は看護の国家試験についての研究はあっても介護のものはなかった、というのが理由のひとつです。その後、EPA（経済連携協定）介護福祉士候補者に教えている人にちょこちょこデータの提供をするなかで、現場で役立つものとして、国家試験の科目別の学習漢字のリストが作れないか考えはじめたんです。知人の日本語教師にも「研究結果は公開しないと意味がないですよ」と言われ、ウェブ教材として形にするのを手伝ってくれる方はいないか探していたところ、角南さんに行き着いたという形ですね。私の場合は、角南さんがプロジェクトに加わってくださって、いつ何をしなければならないのかなど、だんだんと具体的に考えることができるようになったんですが、まず協力者を見つけてコンタクトを取ることが、教育関係者が最初に直面する難しい部分ではないでしょうか。

角南：確かにそうでしょうね。いっしょに制作をする協力者を探しているという点では僕も同じで、研究会に参加したり、手がけたプロジェクトに関する発表を積極的に行ったりしています。ただ、そもそも「サイトを作ることに関わりたいと思う人」が学会に参加していないような印象は受けますね。教材開発、特にウェブを使った事業についての発表は、日本語教育の世界では本当に少ないです。じゃあどこで出会えそうなのか、というと答えがない。

中川：協力者にコンタクトをとる以外に、学習サイトの具体的なイメージや、それを作るにあたって必要な人材や作業の見極めも、高いハードルとしてあるかと思います。プロジェクトの開始前の話をもう少しすると「なぜ学習サイトの開発をすることになったか」に着目すると、一般にパターンがいくつかあるのではないのでしょうか。ひとつは「コンテンツがあるから」というパターンで、そのコンテンツとしては、教材になりそうなデータ、

あるいは教材に使えるような学習法や教授法、ということがあるでしょう。他には「利用者にとってウェブ教材が合っているから」というような、学習者の事情から始まる場合もあります。また「所属機関の事業としてウェブ教材を手がけるよう言われた」といった、自発的なものではないケースもありますね。私の場合は、この中でいうと「データというコンテンツがあった」ケースになります。介護福祉士候補者を教えているわけでもないし、誰かにやれと言われたわけでもないのです。

角南：開発のきっかけで分類するのは、プロジェクトの進め方を考えるうえで良さそうですね。僕は自分でコンテンツを持っていないので、教育関係者から依頼される形で開発チームに加わることがほとんどです。ですので、現場の当事者である他のメンバーとは、ちょっと意識の持ち方が違うところがあるかもしれません。

2-2 メンバーの「当事者意識」の濃淡がプロジェクトの成果に影響する

中川：制作に必要なデータ集めからサイトの開発作業まで、ひとりで全部行なえるような人であれば話は別ですが、実際は複数人の、しかも専門領域の異なるメンバーでチームを組んでプロジェクトを進める形がほとんどです。たとえば今回の場合だと、コンテンツである介護の漢字のデータは私が把握していますが、私は候補者に教える現場を持っていません。サイトの利用者の学習環境については詳しくないわけです。そこで、現場を持つ人にプロジェクトに加わってもらったり、アンケートをしたり、聞き取り調査を計画したりしています。そしてサイトの技術的な部分は、角南さんに協力してもらっています。こうした形のプロジェクトの場合、メンバーの「当事者意識」の濃淡が影響してくる場合がありますね。濃淡があるのは必ずしも悪いことばかりじゃないのですが。

角南：中川さんのおっしゃる「当事者意識」というのは、もう少し具体的に言うとどんなものなんでしょうか？

中川：私の考える当事者意識は、ひとつは「そのことの成否は自分と大きな関わりがあると考えていること」です。それがうまくいってもいなくても自分とは関わりがない、とは考えないという意味です。もうひとつは「自分が積極的に貢献しないと、それはうまく進まないと考えていること」ですね。自分が特に何もしなくても何とかなっていくだろう、とは考えないということです。私が仕事をする場合、両方の意識を持っていることもあれば、後者だけでやっている場合もあります。ことの成否が自分と大きな関わりがないというのは、ちょっと引いた立場で物事を見られるという意味で、それなりに良いところもあると思います。ただ、ひとくちに「ことの成否」と言っても、ケースによってその中身はいろいろあるかもしれません。今回のプロジェクトで考えてみても、とにかく学習サ

イトが無事完成すること、いい学習サイトだなどと思えるものにする、実際に学習者の人に利用してもらえること、利用してもらって成果をあげられることなど、どこまでを見据えるかによっても変わってくるでしょう。

角南：確かにそこはけっこう難しく、開発担当者は「学習者の役に立つこと」と考えているけれど、事務担当者は「滞りなく事務処理ができること」と思っていて、事業責任者は「上司や外部に提出できる報告書が書けること」が大事だと思っている、ということがありますよね。相手の立場を考えて、そういう意識の違いをわかったうえで進めないといけませんね。

中川：そうですね。ただ、いずれの場合でも「この部分は私は関係ないから・・・」というような意識は、プロジェクトにとってマイナス要因になることが多いのではないのでしょうか。この部分は私は関係ないから、あまり深くは考えない。この部分は私は関係ないから、何か気づいても面倒なので意見を言わない。この部分は私は関係ないから、と考える人がいると全体の士気が下がり、一部の人の意見だけで物事が動いてしまう、というように。

角南：一見デザイナーの仕事のような局面も、実は学習をどう捉えるかといった教育的視点が必要なことが多くあるんですよね。教師がそこを「私はITに詳しくないんで」とか言って主体的に考えてくれない、というのはよくあります。例えば、サイトのスマートフォン対応について決めるシーンがあったとします。ウェブ制作者としては「想定する教材利用者のスマートフォン利用率はどうですか」と聞くはずですが。その際に多くの教師は、利用者が不特定多数ではなくクラスの学習者であったとしても、学習者の実態をよく知らないで「使ってる人も結構います」程度に簡単に答えてしまう。さらに「スマートフォン対応もあると安心なのでコスト的に大丈夫なら」と言ってそこで話を終えようとしちゃうんですよね。ウェブ制作者にとっては、「スマートフォンでも見られる程度」の対応でいいのか、それとも「PCよりスマートフォンで見ることを優先する」対応にすべきなのかで、設計レベルで仕事の内容が違ってきますし、どちらが「学習者にとって」良いのかはデータがないとわかりません。学生へのインタビュー、アンケート、あるいは授業中の様子を観察するなどして、利用者の利用状況、利用される文脈を確認したいところなんですよね、本当なら。だから僕はそこで食い下がって、なんとか教師から話を聞き出そうとするんですが、どうしても話はスマートフォンという「IT的な」ことが中心になります。そうなるとう教師は興味がなくなったり、わざわざ調査までして明らかにするほどの重

要度とは受け取らなかつたりして、結局見切り発車的に決めてしまわざるをえないケースが多いです。

中川：で、フタを開けてみればPC向けに作られたサイトを学習者はまったく使わなかった、という場合もありますよね。

角南：そうです。そうならないように、ある程度保険をかけた作りにはすることが多いですが、やはりコスト面は無視できないので限界があります。ITが絡む部分であっても、教師には主体的に考えてもらいたいですね。

2-3 全体を見通すためにはプロセスを共有する必要がある

中川：そうなってくると、話は単なる意識の持ち方にとどまりませんね。意識だけではなく、知識もある程度必要だし、スキルや経験がなければ関われない場合も出てくるかもしれませんし。今回の私たちのプロジェクトについて考えてみると、2010年の夏にこのことを考え始めてから、いろいろな人に会ったり、学会や研究会に参加したりと、自分としては実現に向けてかなりエネルギーを費やしてきたように思います。ただ、これまで学習ウェブサイトの開発というプロジェクトを経験したことがなかったため、全体を見通すことが難しく、学習者の役に立つものを提供するというところまで、自分たちの力で持つて行くことができるだろうかという不安がありました。その不安がどこかで、何らかの形になればそれでいいという妥協につながってしまうかもしれないとも思っています。最善のものではなくても、自分の持っているデータを使って、何らかのものを作ればいいという気持ちも、実際いくらかはあったような気がします。そういう気持ちだと、先ほどの話のように、技術的なことが絡んでくることにまで当事者意識を持って積極的に関わるといのはちょっと難しいかもしれませんね。

角南：全体を見通すというのは、確かに学習サイトの開発経験がないと難しい部分は大きいでしょうね。そこは、制作工程のパターンがわかっているウェブ制作者の仕事だと思いますが、どんなものを作るのが望ましそうか、というヒントは日本語教師の側から出してほしいとウェブ制作者は思うでしょう。そのあたりを改善するには、たとえば日本語教師側が、学習サイトを普段から数多く見ていくことで、ウェブ教材のパターンを理解しておくと思います。以前「NIHONGO e な」^{注4}に収録されたサイトを対象にそういう作業を試みたんですが、少なくとも小中規模で作れるサイトとしては、バリエーションはそう多くなかったです。ウェブ制作者に「イメージとしては**のサイトが近いです」などと例を挙げると、教師側の意図を伝えやすいですし、そこから互いに議論もしていきやすいように思いますね。もうひとつ言えば、ウェブ制作者に対して、学習ってどういうこ

となのか日本語教師が説明することも大事だと思います。僕は「日本語でケアナビ」の開発のときは、日本語教師と外部プログラマーさんの間に入る役回りでした。プログラマーさんには、学習において何が大事かをけっこう説明しましたよ。日本語教育といってもなじみが薄いだらうから、英語を勉強するときをイメージしてみてください、と言ったりして。逆に日本語教師には、ウェブサイトのセオリーや文化的なところを随分解説しましたね。啓蒙活動と言うとちょっと大げさですけど、何かを考えるための基礎的な知識を得るために、資料を作ったり、例え話をしたりしました。難しい話になるほど「もうそこらへんは、詳しい角南が決めてくれたらいいよ」という感じで人任せになってしまうんです。だから僕は、必要な判断材料は提示したうえで、意見が出るまでわざと黙ってたりしました。それは嫌がられましたけど、考えて決めるプロセスを体感してもらえば、日本語教師の側のレベルも上がると思うんですよ。

中川：日本語教師が技術的なことに関わる、あるいはウェブ制作者が教育的なことに関わる場合には、自分の普段関わっている領域から「一步踏み込む」必要があるわけですね。その場合、覚悟とは言わないまでも、ちょっとした思い切りみたいなものが要るような気がします。そこで、そのプロジェクトが、そういう思い切りができるような体制になっているかが大切なのではないのでしょうか。ちょっと曖昧な言い方になってしまいますが、コミュニケーションがきちんととれているチームであれば、思い切って他の領域に踏み込んでも、何らかのフォローが得られる。仮に自分の意見が結果に反映されなかったとしても、その思い切りは必ずしもムダにならないと思います。でも、コミュニケーションが足りていないと、その思い切りを受け止めてもらえず、思い切り損になってしまう。または、自分が一步踏み込んで関わった結果がプロジェクトにどう反映されたか知らされないまま、時間が流れて、あるとき急に、それが別の大きな問題に変化して現れる、といったことが起こりえるのではないのでしょうか。コミュニケーションがあれば、即相手の領域にも主体的に関われるかということ、そうではないかもしれませんが、十分なコミュニケーションは必須だと思います。

角南：思い切り、たとえば会議で発言する勇気みたいなものは必要でしょうね。それは「何でも自由に言ってよい空気」とかいったものだけでなく、自分の言ったことがプロジェクトを前に進めている実感が発言者にある、というのも大事じゃないかと思います。そのためには、どういう類いのことを言えばいいかというイメージ、発言が積み重なった結

果何が見えてくれば良いのか、みたいなものは最低限共有できていないといけないかな、と。何でも好きなこと言ってね！では、かえって言いにくいでしょうし。

2-4 プロトタイプを作って、見えてきた

中川：当事者意識を持てるか、持ち続けられるかどうかには、その人に何が見えているかということも関係があるのではないのでしょうか。サイト開発は現在どのような段階で、取り組んでいるものがどのように完成に近づいていくのかということが見えている、あるいは見えるようになってくるということを知っているかどうかですね。仮に最後まで見通せていなかったとしても、その見え方が変わってくれば、意識は維持できるような気がします。今回のプロジェクトでは、早い段階でプロトタイプ（ここでは実際にサイトの形で画面の遷移やデータの表示を確認できるもの）を作りましたよね。

角南：そうですね。中川さんたちのお話を聞くなかで、自分の中では具体的な形が浮かんできたんですが、それを伝えるのは難しいと感じたんです。似た形の既存のサイトを思い浮かなくて、データもある程度あることだし、簡単に作ってみようかと。実際に作ってみると、思ったより複雑な仕組みもあったりして、まあ、あまり簡単とは言えなかったんですが。

中川：これは非常に有意義だったと思います。最終的な完成形ではなくても、自分たちが目指すものに近づいているという実感が得られたからです。

角南：経験上、開発の途中で何かをきっかけに、教育関係者のスイッチが入る状態というか、的を射た意見や新しいアイデアがポンポンと出てくるときがあるんですよね。そういうのを見ているととても面白いですし、開発のテンポも一気に上がるので、僕はすごく好きなんです。今回のプロジェクトでは、このプロトタイプがそのきっかけになったのかもしれない。先に話題に出た「僕はあえて意見を言わずに黙っている」というのも、これを期待する部分があったりしますね。

2-5 主体的に関われる立場をデザインする

中川：そういう道具的なことに加えて、私は「立場」というものも、当事者意識を持てるかどうかにおいて大きな要素だと思っています。最初に角南さんに協力を依頼したときのやりとりで、どういう立場で関わっていただくかの話になったときに「仕事の対価につい

ては、金銭的な価値というよりも、そのプロジェクトに責任と権限を与えられて取り組めるか、が個人的にはより大きい」という話をされていましたよね。

角南：そうですね。何かを作る、設計するということはコストのかかることですし、それをするのが僕の仕事だと看板を掲げているわけですから、金銭的価値が重要でないわけはありません。ただ「ほぼ無償のアドバイザー的な立場だから発言も割く時間も控えめに」となると、プロジェクトの進行やアウトプットの質も結果的に良くないものになり、それに関わったことを自分で誇れなくなるようなケースがありました。それならば、良いものを生み出すのに積極的にコミットして、それが評価されることで間接的に自分に返ってくるんだと考えようと。

中川：これは私が非常勤で教えていたときによく感じたことなのですが、月曜日から金曜日まで毎日授業があるコースで、自分は非常勤でそのうちの1日のみ教えているといった場合、自分が知らないところで、いろいろなことが起きているわけです。そうすると、主体的にコース全体に関わるのが難しいと感じることがよくあります。その場合、自分はこの日だけの担当だから、と割り切れれば精神的にも楽なのですが、自分が知らない間に起きていることの影響を自分が受けるような場合には、大きなストレスになりますね。

角南：僕も非常勤講師をしているので、その感覚はよくわかりますね。たまにしか学校に来ない教師だからこそできることを、というような割り切りをしましたが、コース全体のデザインやマネジメントに問題を感じているときは、いろいろ歯がゆさを感じますね。同じ会社の同じチームだけで何かを作るような場合は、関係者全員が当事者意識を等しく持ちやすいのかもしれませんが、部署や会社が違う、あるいは立場や責任、利害関係が違う人たちと仕事をする、ということの方が実際は多いと思います。そういう場合に「自分がこのプロジェクトに貢献できること・期待されていること」がある程度自覚できるような状況でないと、主体的な関わりというのは難しそうですね。

中川：つまり「当事者意識があるから、主体的に関われる」というのと「主体的に関われる状況・立場があるから、当事者意識を維持していただける」というのと両方あるわけですよ。

角南：そう考えると、プロジェクトの参加者が当事者意識を維持できるようにするためには、プロジェクト全体の目的や到達目標をきちんと掲げて共有するだけでなく、メンバーの個々の事情や専門性・スキルなどをよく理解したうえで、それぞれが主体性を発揮でき

る役割を持てるようにすることが大切、と言えそうですね。これはプロジェクトのリーダーがメンバーの選定をする段階から重要になってきますね。

中川：そうした面を整えたうえで、日本語教師もウェブ制作者も「何をどう作ったらいのか」というコミュニケーションに対して、互いに一歩踏み込むことが大切になってくるということですね。

角南：はい。僕は名刺に「デザインはデザイナーだけのものじゃない」ってコピーを入れているんです。これは、ウェブサイトのデザインプロセスに、クライアントが主役として参加できるかどうか、クライアントが自分で発見して、学んで、理解して、判断できることが大事だ、という思いからです。そこをいかにサポートできるかが、自分の仕事の鍵だと思っています。

2-6 スマートフォンによって教室外の学びが変わった

角南：学習者にとって有益なウェブ教材を作れるかどうかで、そういうものを教師が実際に授業で使っているかも大きいと思います。でも、ウェブ教材が授業に与える影響で、教材の利便性などの問題にとどまらないとも思うんですね。知り合いにITを活用した世界史の授業をする高校教師がいるんですが、その人の模擬授業を受けさせてもらったことがあって、本当に面白かったんです。自分が高校のころに受けた授業とは、まるでアプローチが違って、教師が解説しながら重要事項を黒板に書いていくようなことはほとんどありません。図版などの資料をスクリーンに大きく映して、そこから想像できることを学生とディスカッションしたり、学生が各自でネットを使って調べ発表したりすることが中心なんです。その人が言うには、それまで自分は「学生より知識があること」が教師としてのプライドだったが、今や教科書程度の断片的知識はネットですぐ調べられる時代になって、学生に「先生は何が偉いのか」と問われたんだそうです。そのことは大変なショックで、それから、教師の役割は何か？ということを考えに考えたということでした。

「情報機器は教師の役割を変える、教育とは何かを教師に問いかけるもの。ただし、それまで自分を支えてきた『知識』の価値を否定してでも自分を変えるというのは、本当に痛みが伴うものだ」とおっしゃっていたのが印象に残っています。キャリアが長いと、かえって難しいこともあるのかもなあと思います。

中川：「学習者が学ぶ手助けをする」という教師の目標（存在意義）は同じでも、その手段、役割は変わらざるを得ないということですね。ただ、日本では、というか教師がその専門知識を使って教えて、学習者はそれを拝聴するという伝統的な教育観の強いところでは、その教える手段、学ぶ手段を変えることは難しく、逆に言うと、教師はそれにあぐ

らをかいていても「環境が変わらないので、自分も変わらなくていい」ということでしばらくの間は許される。それは「自らを変えること」を怠ることにつながりかねませんね。

角南：学ぶことは変わることだ、という考え方を支持する教師は多いのに、いざ自分が（教育の手段や教師の役割の面で）変わると迫られると、それを避けるような言動を取っちゃうところがあると思います。気持ちはわかる気がするんですけど、それではダメなんですよ。

中川：教師の仕事は授業内で完結している、と考えてしまいがちなところも、紙の教科書と比べて学習サイトに意識が向かない要因なんじゃないでしょうか。日本語教師には学習者の自律学習のサポートという仕事がある、と思っている教師は多いと思います。しかしながら、教師として自分が主に担当するテリトリーは授業内の学び。そして通常授業では、教科書を使って教えるスタイルが中心なので、業務遂行上、教科書についてはよく知っておきたい。もちろん、教科書を使わない授業もありますが、やはり中心は教科書がある程度利用するというスタイルでしょう。そう考えると「授業＝紙の教科書」という図式はなかなか強固かなと感じます。私は小出記念日本語教育研究会という研究会で委員をしていたのですが、その時に会話の教科書をテーマにシンポジウム＋ワークショップをしたら、例年100人前後だった参加者が、プラス100人以上になったことがありました。これは10年ほど前のことだったのですが、これが紙の教科書ではなく学習サイトだったら、これほど集まったかどうかはわかりません。というのは、紙の教科書も学習サイトも学習の手段のひとつであるという認識を、どのくらいの日本語教師が持っていたらろうか、と思うからです。これからは電子書籍として出てくる教科書も増えてくるでしょうし、4技能をうまくカバーするには、なんらかの形で印刷された書籍以外のものを利用するのが得策である気がしますね。

角南：そうですね。10年前でなく今であっても、似たような結果になる気がしますね。日本語教師にとって、ウェブより書籍の方がずっと身近で「使えるもの」というのは、今もあまり変わらない認識かな、と思います。中川さんがおっしゃった通り「教師の仕事が授業内で完結していると考えている場合」は、確かに授業とサイトを結びつけて考えるのは難しい面があるでしょうね。僕自身が、いま日本語の授業を直接担当していないのも、発想を自然に授業外までに広げて考えられる理由の1つかもしれません。学習端末としてのPCやiPadを、ネットへの常時接続も前提で自由に使える授業環境はそうないでしょうから、留学生のスマートフォン所持率の高さに注目して、授業の内外で活用できるものをウェブ教材として提供するのがベターかな、と思ってやっています。わざわざPCルー

ムに行かないと使えない教材なんて、学習者が自発的に活用するとは思えないですよ。だから思い切ってスマートフォン専用サイトでもいいかなと思うくらいです。これが「授業で iPad を使うのは当たり前」みたいになってきたら、電子教材的な教科書の有効性は高まるでしょうけど、それにはまだ時間がかかりそうですから。なので「教師の意識をいかに授業外に向けさせるか」は、教師自身がスマートフォンの便利さを実感することや、学生が活用しているのを目の当たりにすることが有効な手段かもしれません。その関連で言うと、ウェブ制作者と日本語教師が共同作業するための共通言語のひとつには、「スマートフォンの利用体験という共通の感覚」があるのかも、と思っています。授業でわからない単語をその場でスマートフォンで調べるような、電子辞書的な使い方から始まるのが、ツールとしての実体も伴ってわかりやすいし、教師も自身の利用体験で意見を出しやすいんじゃないでしょうか。

中川：毎年来る交換留学生を見ていても、ほとんどの人がスマートフォンを使用していますし、紙の辞書を使う場合よりも調べることを面倒がらなくなっているような気がします。私も教えていて訳語などあやふやな時にはスマートフォンを持っている学生に調べさせるようにしています。学生のスマートフォンの使い方からこちらが学べることも多そうですね。現在の授業の枠組みを大きく変えるのには抵抗を感じる人も多いと思うので、角南さんがおっしゃるように、今の授業に何かプラスする、または補うぐらいの感じで始められるようなものがないのではないのでしょうか。その意味では、パソコンを立ち上げなければならないようなツールより、スマートフォンや iPad のようなものの方が抵抗感は少ないかもしれませんね。

角南：僕が聞いた話では、これは iPhone というより iPad の事例ですが、学習者のスピーチを録画してその場で再生して確認したり、PowerPoint のスライドを PC より楽に見せたりできるといった話ですね。iPhone はもっと電子辞書的な使いかたに適していると思うので、ちょっとしたリファレンスサイトをスマートフォン対応させるのが比較的簡単で使い勝手もいいのではないかと思います。ざっくり言うと「学生も持ってる人が多い端末なら有効に使おうよ」ぐらいが、僕の中のウェブ教材のスマートフォン対応の意義ですね。

2-7 教材制作をパラダイムシフトできるか

角南：そういえば「NIHONGO e な」の開発序盤にサイトの方向性を考えるとき、関西国際センターに来ている研修生に「ネットを使った学習経験」についてインタビューしたことがありました。ネットを使っている人と使っていない人の活用具合の差がけっこう大きかったのですが、中でも多くの方が例に挙げていたのが、「自分の書いた言い回しに自信

がないときに、それを Google で検索して実例を確認する」ということでした。これは、ウェブ上の自然なリソースを学習素材にしているという点で、手元の教科書や授業時間では学びが完結しないことを表していると思います。以前なら、教師や知り合いに聞いて確かめていたようなことも、今はデータベースを活用することが普通なんですよね。そんな時代なので、「日本語でケアナビ^{注5}」のような学習リファレンスサイトの制作の際は「Google ができること、Google が得意とすることはやっても仕方がないので、価値のあるデータベースを作り、価値のある検索体験をデザインしましょうね」ということをクライアントに言っています。

中川：そうですね。私たちが現在取り組んでいるのは、まさしく「価値のあるデータベース」作りだと思います。あとは「価値のある利用体験」のデザインというところで、どのような方向性を打ち出すかですね。

角南：まあ、実際はそのことを理解してもらうことも簡単ではなくって、ウェブに対する学習者との認識の距離をどう縮めるかは大きな課題ですね。

中川：教師と学習者の間のこの認識のギャップって、iPad や iPhone のようなデバイスの活用経験や、自分が育ってきた学習文化の違い、世代の違いというのも関係があるのかもしれないですね。

角南：学習者がいろんなリソースを活用できるように、そもそも教室の内外にいろんなリソースがあること、ウェブもそのひとつだということに、まず教師が気づかないといけませんね。そうじゃないと、環境を整えたり学習者を支援したりするのは難しいと思います。

3. おわりに

日本語教育分野の学習ウェブサイトの開発に関する報告は複数あるが、必ずしも開発過程における課題、問題点が日本語教育関係者の間で共有されているわけではない。そのため、新たにサイトを開発する場合に過去の事例を参考にできず、同じ課題に直面してしまうことが少なくない。中川他（2013, 2016）等で指摘されているように、実際のウェブサイト開発の課題には、本稿で指摘したもの以外にも異分野間の協働、学習デバイスの変化、専門内容の正確さの担保、教材を使用してもらうための継続的な環境整備など多岐に渡っている。このような課題が日本語教育関係者の間で広く共有され、よりよい教材の開発につながることを願うものである。

注

1. 漢字学習ウェブサイト「介護の漢字サポーター」 <<http://kaigo-kanji.com>>
2. 介護用語検索ウェブサイト「介護のことばサーチ」 <<http://kaigo-kotoba.com>>
3. 介護用語学習支援サイト「かいごのご！」 <<http://kaigonogo.com>>
4. 日本語学習ツールポータルサイト「NIHONGO e な」 <<http://nihongo-e-na.com>>
5. 看護や介護の仕事をする人たちを支援する、日本語学習ツール「日本語でケアナビ」 <<http://nihongodecarenavi.jp>>

参考文献

- 中川健司・中村英三・角南北斗・齊藤真美・宮本秀樹・布尾勝一郎・山岸周作（2013）「漢字学習ウェブサイト『介護の漢字サポーター』開発過程で直面した課題」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.19 No.1 pp.4-5
- 中川健司・角南北斗・齊藤真美・布尾勝一郎・橋本洋輔・野村愛（2016）「ウェブ教材を利用してもらったための環境づくり—『介護の漢字サポーター』『介護のことばサーチ』の実例を基に—」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.22 No.3 pp.62-63